

人生最高の楽しみを与える

わたしは、このごろ、映画を観に行く暇がありませんし、あっても、書物を読む方がずっと楽しいので、結局観ないことになります。

しかし、若いころはよく観ました。特に、感激して読んだ文学作品が映画化された場合には、期待して観に行ったものです。が、ほとんどのものに幻滅を感じたように思います。

映画には映画だけのもつ良さがあるのですが、それぞれの人が心に描くものの美しさを、現実に表現することはまず不可能といえましょう。どんな名優が、どんな名演技を見せてくれても、やはり心が描く美しさにかなうものではないようです。

ことにわたしは、小学校にはいる前から、本を読むのが好きでした。絵本よりも、絵のない物語の方が好きでした。これは、幼い時に母親の物語を聞いて育ったためだと思います。

無限に想像をくり広げながら聞く楽しさ、それが物語を読む楽しさにつながったのだと思います。

そして、読み終わったあとも、その物語の世界に没入し、物語の中

をさまよう楽しさを味わったものでした。

幼年倶楽部という雑誌が創刊されたのは、わたしの就学前だったと思いますが、不思議なことに、創刊号にあった“一番楽しいお正月”から始まって、26番目の“幼年倶楽部が日木一”に終わる“しり取り”など、いまでもすらすらと口を突いて出ます。

幼い時にくり返し自分で読んだものは、それほど強く頭に焼きついてしまうのです。ですから、幼いうちに読書力を育てて、心の糧となる書物を、心の欲するままに読ませてやりたいといつも思います。